

# 植物が織りなす文化と都市創造性(2)

## 「メタセコイアと進駐軍」

都市研究プラザ教授 岡野 浩

進駐軍からの贈り物？

前号では、三木茂（本学・理学部）の教え子である引田茂（大阪府立夕陽丘高校、のちに大阪国際大学）を通じて、メタセコイアが及ぼす教育的な影響を見てきた。師の学会報告（1950年）の応援のため名古屋大学まで足を運んだ夕陽丘高校の学生の行動力に驚くとともに、「生きたメタセコイア（の発見）によって（化石だけの分析による）自分の研究がチェックされる」という三木の言葉は印象的であった。

本号では、大阪市立大学の田中記念館前にあるメタセコイアに焦点を当て、数年前から温めてきた一つの仮説を示したい。すなわち、チェイニー（カリフォルニア大学バークレー校）が培養した100本の苗が進駐軍を經由して日本政府に送られたほか、進駐軍が自らの手で植えたものが田中記念館の玄関前の庭、さらには自衛隊の駐屯地

などにいまも存在しているという仮説である。

植えられた時期としては、朝鮮戦争が始まる1950年から1951年にかけてであるが、これはアメリカを起点に欧州をはじめとする世界各地に送られた時期にあたる。また、京都の桂や宇治にある自衛隊駐屯地では多くのメタセコイアを見ることができ、広報に問い合わせたところ、進駐軍が植えた可能性が高いという。

その他、植えられた時期は少し後になるものの、東富士演習場やその近くの富士教育研修所にもメタセコイア並木が見られるし、東京・立川基地に隣接する昭和記念公園にもメタセコイアが植えられ、公園の敷地内にある昭和記念館の正面には4本のメタセコイアが均等に配置されている。また、桂支所のシンボルマークとして3本のメタセコイアが使われている。その経緯は調査中であるが、桂駐屯地のHPの筆

頭にもメタセコイアを掲げていることを合わせれば、非常に重要な意味を持っていることは確かである。次に、上記の仮説を現在入手できる写真によって説明していこう。

大学史資料室に所蔵の写真による仮説の説明

写真①は、返還直後の大阪市立大学の全景（1956年）である。左下のグラウンドのへりに沿って9本程度のメタセコイアが進駐軍によって植えられたことが見て取れる。現在、そこには田中記念館が建てられ、玄関前には同窓生にとって懐かしい「桜花爛漫月朧」の歌碑があるが、それを取り囲むように23本のメタセコイアが植えられている。

JR阪和線の杉本町駅南踏切の東側から「キャンブ・サカイ」を望む写真②（1954年頃）には3本の樹木が見えるが、左の2本はメタセコイアであろう。写真③は、写真②と同じアングルからの返還後の通学風景（1958年）であるが、植えられた年次が上記通り1951年とすれば7年程度経過しており、街路樹らしく成長している様子がうかがわれる。写真④は現在の状況であるが、すくすくと大きく育っていることが分かる。

チェイニーと胡、三木との結びつき

胡先骕（北京・静生生物研究所）

は、生きているメタセコイアの存在を、恩師であるアメリカ、ハーバード大学のメリルに伝えた（岡野・塚腰2015）。メリルは種子を採集してもらうために胡やチェイニーに資金を送るとともに、三木が付けたメタセコイアという名前は使わないように伝えた。これに対して、胡は共同研究していたチェイニーにもメタセコイア発見の情報を伝えるとともに、チェイニーの四川省での採取を側面から支援する。さらには、三木が付けた名前を踏襲し、メタセコイアとしたのである。これは結果的にハーバードの恩師の方針に背くことになったが、この胡の行動をどのように考えたいであろうか。さらには、中国随一の植物学者であるとともに詩人であった彼は、亡くなる数年前に『水杉歌』を書き、三木をその歌に詠みこんでいる（胡1962）。

劫灰初认始三木、胡郑攀几继前軌。  
（メタセコイアの化石を発見したのは三木であり、胡と鄭がこれに続く。）

チェイニーは三木に「中国でメタセ

コイアの保存に努めてはいるが、気候の似た日本で組織をつくって苗木を育成し、保存に一役買ってくれるなら100本の苗木を送る」といった。三木はGHQ(連合軍最高司令官総司令部)の天然資源局長スケンク氏(終戦までスタンフォード大学教授であった)を含む「メタセコイア保存会」を作り、1950年2月28日に100本の苗木が到着した(岡野・塚腰2015)。

日中米の協力、そして少数民族からの贈り物

上述のようなメタセコイアをめぐる植物学者間のネットワークの重要性もさることながら、メタセコイアそのものが持つ「隠れた意味」を考える必要がある(岡野2016)。すなわち、絶滅することなく残っていた中国・湖北省(当時は四川省)の社会関係や習慣、文化など、どの部分が欠けても、われわれの眼前にあるメタセコイアは存在できなかったのである。すでに日本やカリフォルニアでは第三紀に絶滅してしまったメタセコイアが中国で神木として保存されたことについての少数民族(土族や苗族)の役割の解明が必要となるのである。また、メタセコイアは石炭の原木として、産業革命で、

そして、近い将来再び重要な役割を果たすかもしれない。植物の知識を得ることを超えて、三木の主張した植物の「本性」を捉えようとする態度が一層求められよう。

(参考文献)

岡野 浩・塚腰 実(2015)『メタセコイアと文化創造：植物的社会デザインへの招待』大阪公立大学共同出版会。

胡 先骕(1962)「水杉歌」胡先骕(作)・張紱(選注)『汗庵詩選注』四川大学出版社、2010年。

岡野 浩(2016)『植物社会デザインと都市の創造性：大阪の都市間ネットワーク』(都市研究プラザ・レポートシリーズ合冊版)(5つのレポートは都市研究プラザHPからダウンロード可)

(付記)  
本年9月22-24日の都市研究プラザ・10周年国際シンポジウム、10-11月の大阪自然史博物館との共同企画(博学連携事業)および来年6月7-11日の日本植物園協会年次大会(秋篠宮様ご臨席予定)とそれに続いての田中記念館および私市植物園で開かれる本学主催による国際シンポジウムにおいて、メタセコイアと創造性に関するセッションを企画している。



① 進駐軍から返還直後の大阪市立大学の全景(1956年頃)  
(出所)『大阪市立大学の百年』(大阪市立大学、1980年)



② 進駐軍「キャンプ・サカイ」(1954年頃)  
(出所)『写真で見る大阪市100年』(大阪市、1989年)



③ 通学風景(1958年頃)  
(出所)『大阪市立大学の百年』(大阪市立大学、1980年)



④ 現在の田中記念館前のメタセコイア(2016年)